

末黒野

すくろの

12月号 (通巻868号)



京都三尾そして嵯峨野

松本三千夫

(名誉主宰)

杉巨木三尾の磴塞く台風禍

高尾もみぢ家

さはやかや京訛なき配膳婦

竜安守

油土塀の艶石に映え秋気澄む

あだし野念仏寺

八千の石塔の聴く秋の声

愛宕念仏寺

千体の羅漢声挙ぐ秋澄むと

落柿舎の蓑笠ゆかし柿映えて

柿照るや落柿舎の句碑なぞり読み

竹林の小径秋の日入れざりき

鳥渡る

黒滝志麻子

湖へ起伏の激し花薄
山の気を散らす羽音鴟猛る
雨止みぬすぐに火のつく虫の闇
爽やかに男一礼蕪村の碑
石庭の白砂波打つ竹の春
踊り笠脱ぐや少女の初々し
黄せきれい飛び立つ空を眩しめり
庭を掃く僧ひと叢の野紺菊
潮風の肌のしめりや萩の花
釣舟のもどる漁港や秋夕焼
上げ潮の早さも鳥の渡るころ
黒松の大樹に消えぬ秋の蝶

葡萄狩

溶岩原の砂礫に転び富士薊
語る背の人それぞれや敗戦日
蟬蟻の群の伸縮沼の上
源流の森の奥より秋の風
新しき蹲踞の杓秋澄めり
箒目の乱れのあらず萩の寺
左手の受くる量感葡萄狩
影連れで行きつ戻りつ鬼やんま
一輪車の子の手ひらひら秋うらら
木犀や一灯のみの闇ふかく
ゆつたりと雲影走る稲田かな
律の風堤の鷺のみじろがず

森
清
堯

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

天の川

森清信子

四方より蟬の声湧く城址かな
雲染むる浦曲の夕べ石たたき
波音を樂とし隠岐の天の川
舟底の砂こする音 鱗雲
ゴンドラの突と現れ霧ぶすま
ビロードの感触の苔霧迅し
音符めき朝のまばゆき芋の露
みそはぎや濁る田川のおふれをり
八千草を活けにけり野にあるやうに
枝豆を真つ青に茹で夫を待つ

白露

安斎久英



すつぱりと花野の内や農具小屋
秋雨を寂と歩めり老夫婦
白陀師を偲ぶよすがの白露かな
銀色の雨粒軒に秋の暮
花野行く母子夕日を背なに負ひ
晩秋や動物村に子等嘻嘻と
秋暁や茜をよぎる番鳶
潮の香のしめり纏へり秋の風
タンカーの潮路に乗るや秋の暮
行く秋や雲が雲追ふ波の果て

秋の蚊

石黒興平

木道や風より軽き糸とんぼ
楽しき日過ごせし証日焼の子
教はるやたちまち草矢遠くまで
かき氷濡るる釣銭渡さるる
籐椅子や永き余生の抛り所
高原の小振りなる駅夏惜しむ
竹林に入れば風音夏逝けり
まどろみの覚めて夕かなかなの
投函をすませ秋の蚊連れ帰る
蛸をしほに釣竿をさめけり

星月夜

岡野里子

新涼を乗せてとどくや暁の鐘
風は秋芝原の日の燦々と
法師蟬日の斑の揺るる大櫂
秋風の抜くる客間や藤村忌
終バスの尾灯闇路へ星月夜
学校に隣る稲田や始業ベル
杣道の暗きに咲けり時鳥草
巡視船秋潮切つて沖目指し
切株の深き年輪つくつくし
展ごれる芝原寂と秋日燦

秋彼岸

田中臥石

震災忌輪廻の今を生きぬたり
値上がりの秋刀魚落着く日照雨
恙妻甘藷を蒸してぬたりけり
牛飼の友訪ふ道や野紺菊
牧童の刈りこんでゐる飼料黍
牛臭き友の衣服や猫じやらし
道の辺の一村擁く稲穂波
秋冷の峠海透く山武杉
波郷碑へ参ると決める秋彼岸
筆耕の机より見ゆ曼珠沙華



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



北の地震

菅野日出子

河童忌や寺の裏道蜘蛛の糸
ベッドより火星を仰ぐ涼夜かな
雷鳴の一喝に散る鳥どち
広島忌便りとだへし友のこと
膝病んで躍り大鼓を遠く聞く
そぞろ寒ニュース伝ふる北の地震
拾ひ読む亡夫の日記や夜の長き

星ともる

斉藤マキ子

花野風

加藤静江

幼らの声を乗せくる花野風
鳥声の絶えて久しき残暑かな
秋の蟬いよよ昂る雨上り
子等はしやぐ苑の水場や草の花
秋草の中より堰のひびきかな
葦原の葦の高さや雲流れ
かすかなる虫の音静寂深くせり

新盆のすみし安らぎ星ともる
雲は峰崩さぬままに秋に入る
山巔に雲湧き立ちぬ原爆忌
山頂の石積む標赤とんぼ
星屑を降りこぼしてや草の露
たふたふと浮棧橋や黙の潮
葉鶏頭夕日捉へて阿修羅めき

青炎集

黒滝志麻子選



横浜

山口郁子

横浜

伊藤由良

虫集く古刹の庭に読経めく

秋霖の引戸重たく軋みけり

団栗や小谷戸の風のおとしもの

残り蚊の夕のひと刺し歩の乱れ

品書きに新蕎麦の文字加はりぬ

蔓の先少し休めて葛の花

横浜

渡辺富士子

横浜

小嶋絃一

深山を越え入る風や初紅葉

峰映す湖面飛び交ふ秋燕

鈴虫の声遠のくや夢に落ち

大木に玻璃ちらすごと苔しのぶ

美し国の地震台風鎮魂歌

山よ谷よ祖母の住ひし里や秋

九月はや乾く風たつ朝かな

昨日とは違ふ目覚めの秋気かな

列島は長し野分と地震に暮れ

皮むけば香り豊かや里の桃

冬瓜の味なき味をいかにして

南蛮のつらぬくごとき辛さあり

新涼の朝の散歩やハーブの香

颱風の前の西空朱を濺ぐ

日は照るもにはかにせまる野分雲

雨脚や台風せまる街静か

紫の熟れたる匂ひ葡萄畑

どうしても似合はぬ帽子敬老日

横浜 根本公子

灯をともし巫女の浮かびぬ夏祓

踏切の長き警報秋暑し

新涼や石の奏づる波の音

生身魂余生余白の余裕かな

厨事水さえざえと白露かな

雪洞の避難余儀なき野分かな

横浜 饗庭恵子

陰を出て姿あらはに黒揚羽

いくらかの疲れも見えて盆果つる

八朔の仏飯高く盛りにつけり

姿見の奥までもゆる残暑かな

谷道の昏きを弾く鴟の声

木の実降る賽銭箱にかるき音

狭山 沼崎千枝

撫子の広がる裾野八ヶ岳

林間を吹きぬぐる風男郎花

寝ころびて視野いつばいの星月夜

信濃路の闇の黙裂く流れ星

水切りのやうに湖面の秋燕

諏訪大社の太き柱や水の秋

横浜 斉藤雅子

夾竹桃の盛る紅白風の道

ラムネ玉昭和の音色そのままに

夫婦にもほどよき間合秋扇

ひらひらと木洩れ日に消え秋の蝶

稲刈機のひびく谷戸道風渡り

雨止みて秋空映す潦

横浜 樺澤やすの

模擬店のカレー作りや秋祭

蓮の実のやはく炊かるる箸休め

竹塩を添へ山盛りの衣被

風に鳴き風に鳴きやみ草雲雀

里寺に別れ惜しむや去ぬ燕

秋の蜂あわてて移す縁の句座

横浜 早川八重子

芙蓉咲く朝の風のやはらかく

病む妹の文の待たるる宵の秋

かなかなの夕べの空の深さかな

風立ちて萩の繚乱宝戒寺

秋草を野にあるやうに活けにけり

虫の音の眠れぬ夜のゆたかかな

耕 土 集

森清 堯選



一村の音をひとつに蟬時雨

横浜 池乘恵美子

喜寿傘寿のここぞとばかり村祭

憂きことの何もなき日や水澄めり

言ひ難きを追伸にして夜半の秋

鬼灯の鳴る子鳴らぬ子頬赤く

歩み出しさうなる案山子母の郷

横浜 宮之原隆雄

雲高し本家の跡の昼ちちろ

城蹟の博物館や秋の蓮

秋暑し路面電車の窓掛けに

をさな子の手土産ひとつの草

蔓草のもつれもつれて処暑の風

横浜 峰 幸子

野分去り朝の軒端の雀どち

蝸や暮れの坂より我家の灯

敬老日誰のことかと白寿翁

風鐸を揺らせる風や萩の波

鰯雲沖の小船の模糊として

横浜 秋山 文子

夕風に揺るるを委ね女郎花

一輪の青磁の壺や白桔梗

塩むすびのふはり大きく今年米

秋高し男子ばかりの神学校

絡む蔓引きて夏草薙ぎ倒す

西東京 河口 知重

歩を止めて拾ふ病葉菜にと

現世に長き足踏み夏は行く

秋立つや烈日未だ動かざる

まどろむや耳にやさしき法師蟬

工事場の風力計や秋高し

横浜 小原 紀香

老人の低き口笛秋暮るる

干す烏賊の腕のぶらぶら島日和

猫に似る赤子の声や秋ついで

一葉の櫛を見てある秋思かな

つくつくし

小川 玉泉

(名誉顧問)

味噌汁の具の秋茄子の種あらず
豊漁に安値のさんまけふも焼く
仏壇と墓前へ庭の紫苑剪る
夕闇へ納めの三声つくつくし
寒蟬のなきがら庭に埋めけり
閑伽桶の出払つてをり法師蟬

雑記帳 17

今年の夏ほど冷房の恩恵に預かった年はな
かった。また日本列島の隅から隅まで、災害に
見舞われ、多くの犠牲者が出た夏でもあった。
大自然に及ぶ人知とはと、ふと思った。